

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530607

研究課題名(和文)現代社会における「生きづらさ」に関する芸術社会学研究

研究課題名(英文)Art sociology about the feeling of difficulty to live in modern society

研究代表者

藤澤 三佳(FUJISAWA, Mika)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：00259425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：現代社会における「生きづらさ」という感情に焦点を当て、生きづらさを抱える人々が芸術的表現によってどのように解放されていくかに関して芸術社会学のパースペクティブから調査・研究をおこなった。学校における「いじめ」や家族内における「虐待」を体験するなかで自殺未遂をおこない、さまざまな精神的症状を示す人々が、言語的表現と共に映像や絵画、音楽、パフォーマンス等多様なアートの非言語的表現をおこない、その表現に対する他者からの共感によって、生きる意欲を取り戻していくプロセスに関して考察し、支援の在り方についても提言をおこなった。

研究成果の概要(英文)：In the modern society, many people, especially young people are suffering from 'the feeling of difficulty to live'. Some of them are suffering from mental diseases and others are suffering persecutions of domestic, sexual abuse, or of bullying at school. These people tend to attempt suicide to present a variety of psychological symptoms.

But we found that these people become take back the desire to live by such various art behavior as painting, music, performance, video, and moreover, by getting sympathy from others for the representation of the result of their art-behavior, they become even full of lives. I have conducted survey from the perspectives of art sociology how these people become freed from these suffering feeling by various art behavior and even taken back the desire to live.

研究分野：社会学

 キーワード：生きづらさ 芸術療法 アートセラピー 摂食障害 精神科病院 アールブリュット アウトサイダー
アート セルフトキュメンタリー

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の研究開始当初の背景としては、現代社会において国内の自殺者の多さが社会的に問題になり、また自殺者や精神疾患にかかる若者の増加に伴い「生きづらさ系」と呼ばれる若者の存在が社会的関心を集めていたことが挙げられる。したがって、うつ病などの精神疾患や女性の摂食障害、ひきこもり、自傷行為をおこなう若者等の抱える「生きづらさ」という感情に焦点をあてた研究の必要性が社会的に存在していた。

このような生きづらさを抱える人々に対して精神医療は薬を中心とした治療を、また臨床心理学は個人的な悩みを中心とした「心の問題」の解明とカウンセリング等の治療がおこなわれてきた。

それに対して、社会学においては、他者との関係や集団との関係を中心に、生きづらさの解消に有効である「セルフヘルプグループ」研究の機能、そのなかでの当事者の語りと他者の共感に関する研究等がなされてきた。申請者は、生きづらさと自己アイデンティティに関する関心から、上記の生きづらさを抱える若者たちと関わりながら、日本では最も早い1980年代前半から精神障害者のセルフヘルプグループに着眼し、ひきこもりや非行、精神病院といったフィールドで参与観察をおこなってきた(藤澤三佳「スティグマとアイデンティティ:精神病患者会の分析から」『社会学評論』、1992年、「アサイラムと日常世界内の個人の汚染」(『ソシオロジ』1988年)。

しかし、問題が当事者にとって深刻な状況において、その言語化すら困難である場合が現実には多く見られ、この点では国内の社会学では研究が進んでいない状況であり、海外では、こうした多様な表現に関する社会学的研究は、最近の質的研究の将来的展望として注目をあびている。M.M. ガーゲン と、K.J. ガーゲンは、質的研究には、芸術プロジェクトやパフォーマンスも含む研究コミュニティの拡大、さらに「文学や芸術、演劇といった開拓の地が存在する」とのべている。(『質的研究ハンドブック:1巻:質的研究のパラダイムと展望』N.K. デンジン、Y.S. リンカン編著、北大路書房、[2000]=2006:327頁)

この点に関して申請者は、これまで2000年から現在までに、過去計6回にわたり、障害者の芸術活動に関して、精神病院内の外来デイケアとしての絵画教室に通う人達が描く絵や詩の表現をとりあげ、作品の展示会を当事者と共に開催するなかで参与観察をおこない、研究成果をまとめながら十分な準備を経て、本申請研究の着想に至った。

このように社会学からのアプローチとして、言語にならない感情等のさまざまな非言語的表現の分析、表現をグループでおこなう際の人々の相互作用の研究、グループの果たしている機能、また表現活動を鑑賞したり、ボランティアとして支えたりする社会的サ

ポートの考察等の調査研究が必要であるという研究背景が存在していた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の「生きづらさ」という感情に焦点をあて、言語的表現すら困難な人々に関して、芸術や詩、演劇、パフォーマンス、映像等、さまざまな表現方法を用いるなかで他者との関係によってそこから解放されていくプロセスに関して探求する新しい芸術社会学を構想し、展開することである。従来、心理学や精神医学では、このような領域としては、アートセラピー等の治療と療法の分野で扱われてきた。また芸術の分野では、それらはアールブリュット「作品」としての観点からみなされてきた。したがって、それを表現する人間やその生活史に関しては探究されず、表現が生じるための場である人間関係や社会的ネットワーク等を扱うような芸術社会学の研究はおこなわれてこなかったため、このような研究に関する新たな芸術社会学分野を開拓することを研究目的とした。

医療のように表現をおこなうことを治療目的としたり、芸術の世界のように作品を生み出したりする目的ではなく、それが表現される人々の相互作用に関する芸術社会学的研究をおこなうことは、社会学では未開拓の領域であり学術的意義は高いと考えた。

3. 研究の方法

(1)「生きづらさ」という感情に焦点をあてて、芸術活動をおこなっているグループ、当事者集団及び医療クリニックや支援組織、地域の芸術を中心としたコミュニティを創造するNPO等を対象として調査をおこなった。調査方法として、表現活動に関する参与観察等による質的調査をおこない、生きづらさをもたらす社会的要因間の関連を解明し、その問題的状况を解決して生きづらさから解放されていく芸術的活動を通じた相互作用プロセスを、それぞれの集団の特性との関連を中心に比較分析により探求した。

(2)上記調査と並行して理論的研究も進め、芸術社会学の理論面で必要とする、社会学と、芸術学、心理学、社会心理学、精神医学、精神分析学等の分野との学際的な研究をおこなうための資料の収集と分析をおこなった。さまざまな芸術療法に関する調査もおこなった。

理論的研究に関しては、この非言語的自己表現に関する点を含みいれた精神分析等の理論と実践をとりあげて学際的に研究をおこなった。さまざまな精神分析、精神医学、心理学と関連している芸術療法(ユング派アートセラピー、表現アートセラピー等)の治療と療法のメカニズムに関して、芸術活動との比較の対象として分析するという方法を用いた。

4. 研究成果

本研究においては、下記のように図書1冊と、論文3点、国際学会における学会報告を含む学会発表5件という研究成果を持った。

(1) まず本研究は、現代社会における「生きづらさ」に関して、臨床現場に携わる心理学や精神医学と異なり、臨床現場をもたない社会学ではプライバシーに深く関わるために調査が進んでいなかった領域であるが、詳細な聞き取り調査によって、虐待、いじめ、性的問題、DV等、生活史を中心に明らかにした。

特に家族内の虐待や学校のいじめを中心として、「生きづらさ」という感情がどのようにして生じ、精神症状としていかなる状態を示すのかを、主に日常生活をおくる人々や精神科病院に入院している患者の生活史調査、病院における参与観察を通じて分析した。

それらは深刻な内容である故に、言語表現によって示されることが容易ではないものが存在しているので、言語表現のみならず、非言語的表現も含めて、特にさまざまなアート表現の分析並びに、アート表現と語りの関係の分析をおこなった。学会報告として、「生きづらさを表現すること～語りと絵にみる～」(関西社会学会、2014年)をおこなった。生きづらさとさまざまな精神症状の関連、その生きづらさをどのように表現するのかに関しては、精神科病院の外来作業療法科に関する調査をおこない、「精神科病院での芸術活動」(2012年)として論文発表をおこなった。

(2) 第二点目として、本研究は、「生きづらさ」とそこから人間が快復を求め、生きづらさの減少や解消、そこからの解放がどのようにして可能かという当事者にとって最も切実な問題を考察し、そのプロセスに必要な社会的条件を明らかにした。

絵画や映像、写真、詩など、表現媒体によってそれは多様な姿を示すことを調査によって明らかにし、具体的には、2014年日本社会学会報告「生きづらさと、自己表現によるそこからの解放～アートや映像による」をおこない、同年2014年日本社会臨床学会の学会誌に、「生きづらさの自己表現～映像、写真、造形表現による」(『社会臨床雑誌』)という題で論文を発表した。

上記において、さまざまな自己表現について、写真、造形芸術、映像、詩などの表現を中心にして、多様な表現によって生きづらさが減少・解消し、生きる意欲が再びよみがえる過程を明らかにした。

そして、図書『生きづらさの自己表現～アートによってよみがえる「生」』においては、第一部において、作品カラー図版23点、白黒図版46点、計69点の絵画作品分析をおこない、それらの絵画作品分析と、上記(1)において調査をおこなった表現者の生活史分析との関連に関して考察をおこなった。

第二部において生きづらさを抱える人々が自らを撮っている映像のデータベースをつくり、映像作品分析をおこない、第一部と同様に生活史分析と映像作品分析との関連性に関して考察をおこなった。

なお、同書は社会学のなかでは「生きづらさ」と多様なアート表現を含む自己表現を扱う初めての図書となり、学問的なアカデミズムの社会のなかだけではなく、「生きづらさ」を抱える当事者のインターネット上の多くのブログ等や、新聞書評(「朝日新聞」「毎日新聞」「中国新聞」「京都新聞」「週刊読書人」)にとりあげられことから、広く一般市民の人々からの多様な反応を得られ、その反応自体も質的調査データとすることができたことも成果であった。

(3) 第三点目として、「生きづらさ」を抱える人々にとって(1)で扱った虐待やいじめといった被害から立ち直るためには、(2)で扱った生きづらさを表現することが必要であるが、さらにそれは彼らが社会的存在として肯定される「居場所」やそこにおいて行われる「コミュニケーション」が必要である。

特に精神科病院の造形教室のなかで、指導者や仲間、メンバー、ボランティアがどのような行為と役割を示しているかを、現在の調査のみならず、日本においてこのような活動が行われ始めた1960年代からの病院の歴史やアートを用いた作業療法の歴史の変遷を明らかにした。

研究成果としては、生きづらさを抱える当事者が、そこから解放されていくプロセスにおいて、どのような他者との関わりがみられるか、またいかなる支援が当事者にとって支持され、有益で有効なものであるかという点について下記学会報告と図書において示した。

まず上記の居場所や人間関係、他者とのコミュニケーションはグループ内部にのみとどまるのではなく、外部との相互作用も重要であるので、2012年日本社会学会において、表現したものを他者が受け取る共感のメカニズムの分析、他者からの共感がどのように表現者の自己肯定感を高めるかという点を中心に、「精神科病院における自己表現としての絵画活動と鑑賞者の共感性」という題で学会報告をおこなった。

上記図書『生きづらさの自己表現』においても、第一部第一章において「精神科病院のなかの芸術活動」として人々が造形教室を居場所としていく過程の分析をおこなった。「アートとコミュニケーション、鑑賞者との関係」として調査内容を示した。また、同書第一部「精神科病院のなかの芸術活動」において、人々が造形教室を居場所としていく過程の分析をおこなった。

(4) 第四点目として、「生きづらさ」の減少・解消、さらにそこからの解放に関して研

究するにあたって、従来中心となっていた臨床心理学、精神医学の芸術療法等、他分野との学際的関係の可能性に関して研究成果をもった。

具体的には、臨床心理学との交流として、日本と共通点も多くみられる東アジアという範囲で、2013年第49回日本臨床心理学会国際大会『東アジアの臨床心理学～交流の新時代』において「精神科病院内における絵画教室の実践と鑑賞者の共感について」という報告のなかで、国際比較をおこなった。

また、2015年日本描画テスト・描画療学会のシンポジウムテーマ「自己治癒としての描画」において、シンポジウム報告「生をよみがえらせる描画～平川病院 OT 科の例」をおこない、病院の作業療法に関する考察を中心にして、社会学における臨床社会学と、心理学における臨床心理学、芸術療法との相違や共通性を明らかにした。

上記図書においても同様に、第二章「アートと医療・福祉の交差」において、医療の世界における芸術療法の発展について明らかにして、社会的アプローチとの相違、共通点を示した。

そして本研究の立脚する臨床芸術社会学の理論やアプローチに関しては、論文「臨床社会学のパーспекティブ」のなかで、1920年代アメリカのシカゴ学派を中心に、臨床医学と社会学との学際的研究及び、臨床社会学の始まりから現在までの理論的系譜を示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

藤澤 三佳、臨床社会学のパーспекティブ、社会臨床雑誌、日本社会臨床学会編、査読(有)、第23巻、60頁～69頁、2016年

藤澤 三佳、生きづらさの自己表現～映像、写真、造形表現による、社会臨床雑誌、日本社会臨床学会編、査読(有)、第21巻、3～12頁、2014年

藤澤 三佳、精神科病院での芸術活動、社会臨床雑誌、日本社会臨床学会編、査読(有)、第20巻、55頁～71頁、2012年

〔学会発表〕(計5件)

藤澤 三佳、シンポジウム報告「生をよみがえらせる描画～平川病院 OT 科の例」、シンポジウムテーマ「自己治癒としての描画」、日本描画テスト・描画療学会、2015年9月5日、大正大学(東京都・豊島区)

藤澤 三佳、生きづらさを表現すること～語りと絵にみる、関西社会学会、2014年5月25日、富山大学五福キャンパス共通教育棟(富山県・富山市)

藤澤 三佳、生きづらさと自己表現によるそこからの解放～アートや映像による、第86回日本社会学会、2013年10月13日、慶応義塾大学三田キャンパス(東京都・港区)

藤澤 三佳、精神科病院内における絵画教室の実践と鑑賞者の共感について、第49回日本臨床心理学会大連大会『東アジアの臨床心理学～交流の時代』、2013年7月5日、中国、大連大学(日本言語文化学院同時通訳ホール)

藤澤 三佳、精神病院における自己表現としての絵画活動と鑑賞者の共感性、日本社会学会、2012年11月3日、札幌学院大学(北海道・江別市)

〔図書〕(計1件)

藤澤 三佳、『生きづらさの自己表現～アートによってよみがえる「生」』晃洋書房、214頁、2014年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤澤 三佳(FUJISAWA, Mika)
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 00259425